

## 共同研究プロジェクト

# 多様化する学生と大学英語教育

## 2017年度活動報告

陸 君・中窪 靖

### 1) はじめに

3年間という研究のワンクールを終え、2016年の1年間の延長ののち、再び2017年度には、1年の限定で研究を再開した。研究の実施は、臨床心理学部教育福祉心理学科の陸君と臨床心理学部臨床心理学科の中窪靖の2名が担当するクラスで行った。それに伴い、研究の被験者となる学生のクラスも限定して実施することとなった。陸の担当するクラスからは、3クラス（1年次のコミュニケーション1クラスと、1年次リーディング1クラスと、小学校英語活動1クラス）を、中窪の担当するクラスからは、4クラス（2年次コミュニケーション2クラスと、2年次リーディング2クラス）である。

また、7月には、中国より音声学の権威、上海師範大学外国語学部のデビッド・チェン先生を迎えて、「英語の発音はどう練習して綺麗になるのか？」という講演会を開催した。先生のお話はやや高度なものであったが、約20名の発音に関心のある学生の参加のおかげで、講演終了には活発な質疑応答が交わされた。

### 2) この1年の活動と成果

受講生への課題は、過去5年間と同様に、ALC NetAcademy2から、春学期に「英文法コース」を秋学期に「PowerWords コースプラス」をその課題とした。

陸のクラスは、約100名の学生を対象とした。内訳は、1年次生のクラスが2クラスと、小学校教員養成のコースの1クラス分の約30名を合わせた総数である。陸のクラスでは、従来通り、学期始めのレベル診断と実力テストと、学期終わりの実力テストの受験を必修とした。また、春学期を「英文法コース」に、秋学期を「Power-

Words コース」に当てているのは従来通りである。このプログラムにはほぼ6割から7割の学生が積極的に取り組んだ。それは、<小学校教員養成のコース>の学生の存在が大きな要因となっている。彼らは、教員免許状取得後に教壇に立った時、英語を教えることが必須事項である。そこをうまくモチベーションにつなげた指導が功を奏した感がある。

一方、中窪のクラスでは、春学期に計4クラスの学生にまず「英文法コース」の学習に参加するかどうかを募った。この2年次生のクラスの約100名の候補者の中から、参加を表明したのは約40名であった。しかしながら、学期中に14時間をこなすという課題を曲がりなりに最後まで続けることができたのは、12名に留まった。

14時間の学習で、学期末の成績の10%を獲得できるという条件にまずは飛びつくが、プログラム開始後1カ月も満たないうちに、学習が止まってしまう。一方、最後まで続けることができたグループは、たとえ最終授業日までに14時間に届かないとしても、あと1、2時間で目的に達するところまで到達した。秋学期は、全く自主的な方法に転換した。その結果、そのままこのコンピューター学習を続ける意思を表明したのは、ほんのわずかであった。例え、成績の10%を獲得できるという条件があっても、活動の持続のむずかしさが露呈した感がある。

### 3) まとめとして

コンスタントに学習することでより大きな効果を得るという前提で学生の学習を促すことを続けてきたが、これは必ずしもうまくいかない。

本学が導入しているコンピューターソフト

(ALC NetAcademy2) を用いて、学生の英語学習のモチベーションと学習の効果とを約5年に渡り調査してきた。毎日少しずつ学習を進めることのできる受講生がいる一方で、学期末に集中的に学習を進めて既定の時間数を稼ぐ受講生がいる。こうした2つのカテゴリーに属する受講生は課題を達成しているので問題はないとしても、さらなる問題となる受講生がいる。それは全く学習を進めることができないタイプの受講生である。これは、授業に出席できない学生との連動があるのかもしれない。

ただし、このソフトウェアを手掛ける株式会社アルク教育社は、新たなソフトウェアを開発し、学生をより積極的に活動に集中させる方策を考えている。例えば、学生が文章を音読した音声を記憶し、それを模範的な波形と比較対照することのできる機能をソフトに組み込んだ。例えばこうしたソフトを使い、学生にマウスのクリックやキーボードの文字入力だけでなく、耳と口を使った学習を促すことができれば、学生の英語力向上に幾ばくかの弾みをつけることができるかもしれない。